

## 国連アジア極東犯罪防止研修所平成30年度第2回保護司国際研修に対する思い

草津保護区保護司会 西 田 圭伊子

保護司として活動を始めてまだ5年、経験も浅く駆け出しの私ですが、縁あってこの度、研修の末席に座らせていただく機会を得ました。

当初、アジ研と聞いてもどんな活動をされている機関なのか全く想像ができませんでした。そして、研修参加に向けての自分のプロフィール及び事例紹介などの作成をしている間に、いやはや私のような者で務まるものかと不安を感じていたところ、教官の大日向さん、事務官の飯沼さんがやさしくフォローしてくださるので、その不安も消え、参加させていただくのがとても楽しみになっていました。

今回、北は青森から南は福岡の7地区で活躍されている保護司各1名、そこにオブザーバーのお2人を加え、計9名の個性あふれる人々が集いました。

入所後、オリエンテーションを済ませ、本題の第171回国際高官セミナー参加者との意見交換会に保護司一同、国際会議場に足を踏み入れたところ、テレビで見た国連会議のような設備の整った場に、驚きと興奮を覚えました。そこで、この度この研修に参加されている、主にアジア地域9か国からの13名の検察、裁判所、警察などの一線で活躍されている海外研修員及び日本人研修員6名の方々に、私たち9名の保護司がそれぞれ、自分の地域での保護司活動又は自分の担当している事例について、短い時間ではありましたが発表しました。私も、担当の保護観察官から「難しいケース」だと言われたケースの処遇について、日ごろ感じる事、接し方、自分の心の持ち方などを紹介させていただきました。

他県の方の報告は、私にとってもとても興味深いものでした。一口に保護司活動と言ってもやはり地域のカラーがあること、と同時に、新たな担い手が少ないという問題はみんなが同じく抱えているのだと改めて分かりました。

9名の発表が終了し、自由討論、質疑応答の時に、「アイヌ民族についての社会の受け入れかたは？」というような内容の質問があった時に、正直、私たち保護司の全員が「？」と言う感じでした。今回のセミナーの主要課題が「不寛容又は差別を動機とする犯罪に対

する刑事司法的対処」でしたので、セミナー参加者の皆さんは、セミナーが開始された1月初旬から、そうした犯罪に対する知識・理解を深めておられました。また自国においても、多くの異なる民族・宗教を受け入れているという土壌があります。しかし、私たち日本人は幸か不幸か、決して単一民族とは言いませんが、そういったことに今まで十分な関心を払ってきたのだろうかと考えさせられました。現実には、私の街の少し離れた地域では、工場労働者として多くのブラジル、そして中国から来られた方が働いておられ、慣習の違い、理解不足から摩擦が生じている、と言うのを聞いたことがあります。グローバル化が当たり前の現代、こうした現実をしっかりと見つめていこうと思いました。

翌日の海外客員専門家講義ではマーク・ウォルターズ先生が「ヘイトクライムの害悪」というタイトルで、どんな感情（怒り・不安・羞恥心）から次なる行動（予見・回避・防衛・報復）に出るのかと、感情と行動を紐で関連付ける作業を参加者に促し、私たちは見学させていただきました。これも興味深いものでした。

約24時間の短い研修でしたが、世界から称賛される日本で育まれた保護司の活動に誇りを感じるとともに、アジ研が永きにわたってこのアジア極東地域の犯罪防止の為に重要な役割を担ってくださっていること、何よりもハートでアジア地域の高官の方々と結びついておられることを痛感いたしました。

お世話になりました皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。